

ドイツ暮らし雑感

住友電気工業(株) 石田庸治

ドイツで駐在員生活を始めて2年余を経過致しましたが、海外生活の2年といえまだほんの赤ん坊で、日本での30余年の生活経験に比較するとまるで取るに足らぬものであることをお含み置きの上、一読頂きたいと思ひます。

ことドイツに関しては、すでに数多くの研究が為されており、もよりの書店で無数の著者をごらんになれると思ひますが、それらの穴埋め用としての断片的雑感を以下御参考までに書き連ねることに致します。

海外生活を始めるにあたって心構えをいまさらながらふり返ってみますと、会話力のみならず、とくにヨーロッパにおいては、歴史の知識がそれぞれの国情あるいは国民性の理解に極めて重要であることを悟ったしだいです。もちろん世界中を通じて、ビート族あり、ヒッピー旅ありといった様なことには変わりありませんが、すくなくとも海外駐在員として日常生活に馴れ与えられた業務を遂行していくためには、歴史の積み重ねの結果として現存する平均的国民の生活とか考え方とかを理解することが必要条件かと思われまふ。私のとったアプローチの方法は、着いてまず1週間決してタクシーに乗らず、徒歩と市電でホテルから事務所までを往復したことです。地図を片手に毎日道を変えて歩いておきますと、土地感の滋養に役立つのみならず、いろいろなことに気がきます。

最初の発見はドイツ人の歩速が平日と休日とでまったく異なることです。すなわち平日には男女を問わず私よりも速く、休日は逆に遅くなることです。御承知のとおりエホバの神は月から始めて土星にいたるまでの星作りに1週間精を出し、最後の日曜日に太陽を作ると同時にこれを安息日と決めました。もちろん天動説ではありませんが、このキリスト教の教義は現代にお

いても不滅であり、日曜日は教会に行って神に祈りを捧げるとともに十分に休息を取るべき日になっております。たとえば日曜日に自動車を洗ったり、庭の芝刈り等をやっているのを見つけた場合には、発見者は警察に通報する権利を有する、という様な常識もあるとのこと。休息のとり方も、なるほどこれがほんとうの休息かと感心させられます。近くの公園を散歩するとか、もよりの森を散策するとか、春から秋にかけての太陽を満喫して日光浴するとか、商店街のウィンドショッピングをするとかできるだけ身体を休めて翌日からの活動にそなえるのであり、余暇の有効利用などは微塵も感じられません。私を始めとする駐在員諸氏はともすれば土、日曜に事務所に出入し、過激派ともなれば日曜日の夜に、目抜通りに面した事務所に煌々と電気をつけたりしております。いくら日本と時差が8時間あるため、という大義名分があるとは言え、現地の常識をいたずらに刺激することは、つとめて避けるように努力しております。

徒歩通勤における第2の発見は、日本における街区町番制と異なる街路一番地割の徹底です。これは欧米を通じて共通ですが、ほとんどすべての建物、家屋は表通りに面しており、その片側が奇数番地、反対側は偶数番地と統一されております。目的地に容易に到達することができると同時に、郵便の宛名書きが楽であるという利点があります。このことは有史以後の欧米の都市形成が、ほとんど類似の手法で行なわれ、発展の過程においても、ことさら特別な都市計画を必要としなかったことと無関係でありませぬ。現にポンペイの遺跡ですら、現在の欧米諸都市と極めて類似の構造になっております。ドイツの都市はほとんどの場合、ALT-ST ADTという一劃を持っております。ここがそ

の都市の発祥の地ですが、ここには必ず市役所と教会が一对となって中心部に位置し、その周囲は民衆広場（現在は青空市場によく利用され市場広場の名称がつけられている場合が多い）それをとりまく商店街、その外側に住宅と放射状に都市が作られ発展して来たのです。教会の鐘が連打されると人々は教会に集まって祈りを捧げるというやり方は、古今を通じて変わらず欧米人の生活がいかに教会中心に構成されているかがわかります。ドイツ人女性の3大責務は3K（教会、子供、台所）とされていますが、その冒頭にも教会があります。なおそれぞれの街路に囲まれた一区画の内部には、ほとんどの場合路地がなく、各建屋の裏庭になっており広大なスペースが確保されているため、日照権の問題も少ないようです。ドイツの場合は日本にくらべてかなり高緯度であり、かつ冬期はほとんどどんよりと雲がたれ込めておりますので、日照を確保するための生活の知恵であったのかも理解できます。

第3点は電車の着席優先順位です。婦人優先というよりはむしろ身体障害者および老人、そのなかでもとくに老婦人最優先、その次が老人男子又は婦人ということになります。老婦人が乗り込んで来ると男はほとんどすべて、婦人の場合も相手が自分より年長かどうかをとっさに判断して「どうぞ」とも言わず、逃げるようにして席を譲っている風景をよくみかけます。ヒッピーはその例外のようですが、この場合には有権者が堂々とその権利を主張しております。老人福祉が単に社会保障面で充実されているのみならず、老人に感謝する気持、あるいはいたわる気持が日常生活にしみこんでいるようです。

第4は、たとえば電車の中で他の人と身体がほんの軽くふれたような場合、たとえこちらが悪かったのではないかと思うような時でさえ、例外なく直ちに「どうも失礼」と先手を取られることです。これは非常に気持の良い習慣だと思います。しかし2年間の日常生活や業務を通じてこれとはまったく逆の場面にもしばしば遭遇

します。相手との交渉がもつれてしかも客観的に見て相手に非があると思われる様な場合でもこの言葉が聞けないどころか、何がしかの首肯せざるを得ない様な理由を延々と述べ立てられ当方の中途半端な気持の持って行き所がなく困ることがあります。この一見矛盾したドイツ人の両面を明快に解析するのは、かなりむづかしい仕事です。よく言われることは、ヨーロッパ各国とも陸続きで、常時取ったり取られたりと数多くの戦争を経験して来たために、潜在的な被害回避意識があること、それがゆえに一且自分の非を認めてしまうと、あとで大変なことになるという精神構造が出来上がっているのではないかということです。これはドイツ人に限らず、常時いろいろな軍勢が通過した国、すなわちしいたげられた民族ほどこの傾向を強く持ち合わせているようで、これがわれわれ日本国民と基本的に異なる点ではないかと思っております。たとえば重要な話し合いにおいては、「目で物語る」とか「言外の意を汲む」とか「言わずとも当然」といった日本的意志疎通法は、まず絶対に避けるべきでしょう。口頭での約束は無に等しいと考えるべきであり、文書による合意とさらに署名の交換が絶対必要条件です。署名に至る過程においては徹底的に頑張るが、署名し終えた途端にさながら百年の知己のように変身するのが真のドイツ人と思われまふ。ドイツ人はやはり冷徹な合理性に徹した人間であり「陀び」「寂び」などの日本的情緒を持ち込むことはまず不可能かと思われまふ。しかしこの合理性を徹底的に追及してみると、その奥底にはみかけと異なった何かが隠されているかも知れません。この点は専門家の解析にお任せすることに致します。いずれにせよ「正直」「誠意」の2つは万国共通語たり得ます。

本誌の趣旨から多分に脱線した雑録に終わってしまいましたが、今後始めてドイツを訪ねられる方のために何らかの御参考ともなればさいわいです。